

報告

[2022年度入試説明会講演]

私のキャリアとアーカイブズ学 —資料現場における気づきと問題意識—

Let's Study Archival Science: From a Graduate

清水 ふさ子

Fusako Shimizu

はじめに:自己紹介

みなさん、はじめまして。東京大学で特任研究員をしております清水ふさ子と申します。まず最初に、アーカイブズ学に少しでも興味を持ってくださり、この入試説明会をのぞきに来てくださったことをとてもうれしく思います。

今日は「私のキャリアとアーカイブズ学」というタイトルでお話しさせていただきます(スライド1)。私がこのアーカイブズ学専攻にたどり着くまでの、前職の資料現場における問題意識と、そこからどのようにキャリアが転換していったかを、私個人の体験を通じてお話ししたいと思います。あくまで専攻修了生の一例として個人的な体験をお話するのですが、進学を目指す皆さんの何かのご参考になれば幸いです。

私は2012年までは一般企業(製造業)に勤務しており、企業文化施設の担当として、いわゆる学芸業務に従事していました。ここで、これからお話しする資料現場での問題意識が生まれ、2013年に学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻(以下、専攻)に入学します(スライド2)。2015年の修士論文の提出後は博士後期課程に進学し、出産を

学習院大学大学院 人文科学研究科
アーカイブズ学専攻
入試説明会
2022年10月29日(土)
14:00~16:30
開催場所 学習院大学(目白キャンパス)
中央教育研究棟 303教室

PROGRAM

【1】修了生の声をきく
●講演者
清水ふさ子さん(東京大学 人文社会系研究科 特任研究員)
「私のキャリアとアーカイブズ学」
小澤 祥さん(平成30年修了生)
「公文書館の普及活動を考える」

【2】専攻紹介・受験案内・個別相談会

※入場無料
※Zoomでの参加は無料(ただし、下記内容が確認できず、
特別に本場での参加費を徴収する場合があります。お問い合わせください。
※お名前「説明会参加希望」(日本文化)にお名前・ご連絡用メールアドレス

2023年度 春期入試 入試日程 19日(日)後援校・博土後期課程
出願期間: 2023年1月10日(水)~12日(木)
試験日: 2023年2月18日(土)・19日(日)

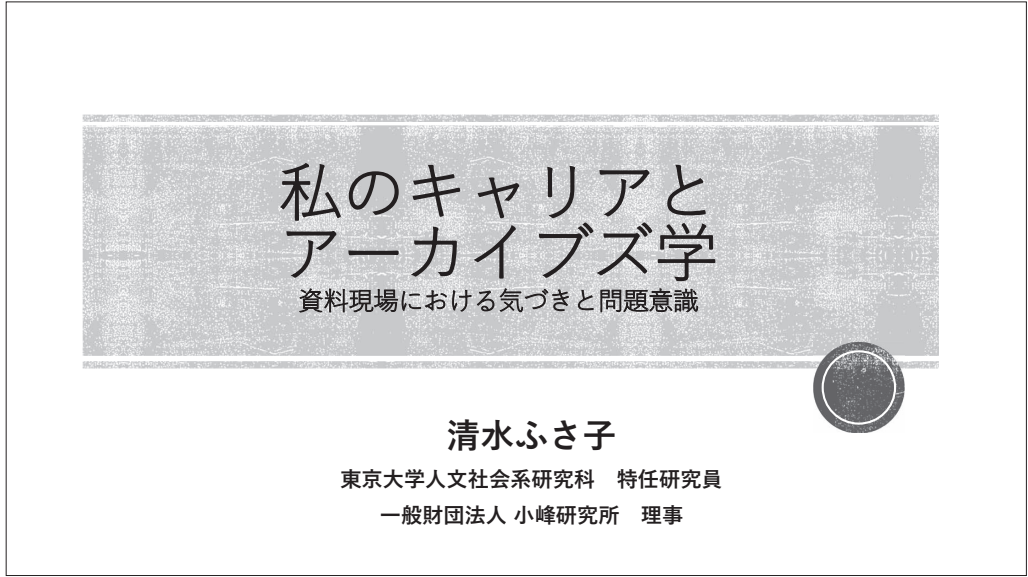
学習院大学大学院 人文科学研究科 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
アーカイブズ学専攻 TEL: 03-3979-1210(直通) E-mail: gcas-off@gakushuin.ac.jp
https://www.archival-science.gakushuin.ac.jp/

記録を守り
記憶を伝える

GCAS
Graduate Center for Archival Science

この報告は、2022年10月29日(土)に開催された入試説明会に伴う講演会「修了生の声をきく」の記録である。なお、部分的に加筆修正した。

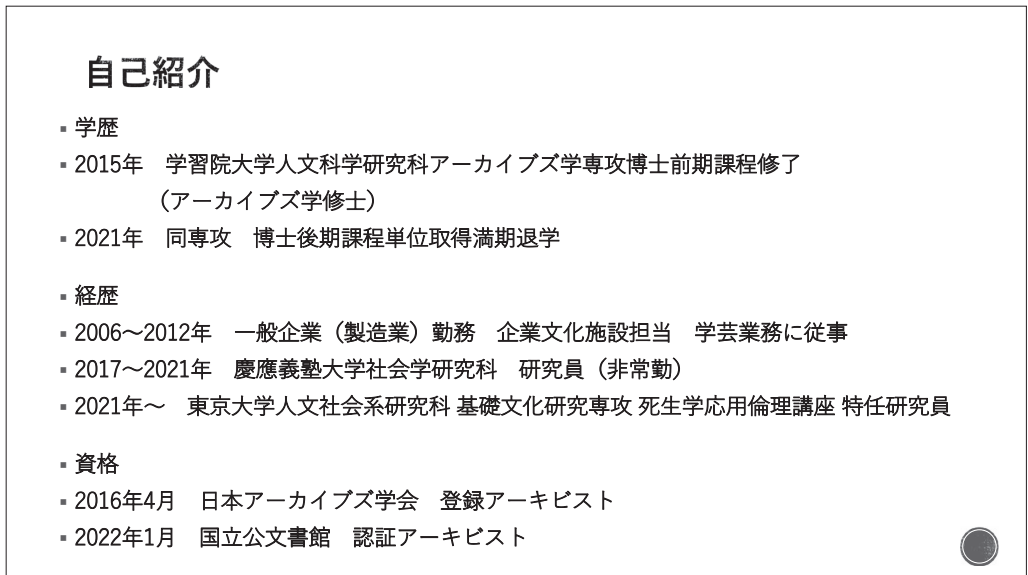
経たのちに、他大学での非常勤職を得ることになりました。私は日本アーカイブズ学会の登録アーキビスト（2016年登録）と国立公文書館の認証アーキビスト（2022年認証）という2つのアーキビスト関連の資格に登録されていますので、「アーキビスト」と名乗ってもよいかなと思っています。



私のキャリアと
アーカイブズ学
資料現場における気づきと問題意識

清水ふさ子
東京大学人文社会系研究科 特任研究員
一般財団法人 小峰研究所 理事

スライド1



自己紹介

- 学歴
 - 2015年 学習院大学人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士前期課程修了（アーカイブズ学修士）
 - 2021年 同専攻 博士後期課程単位取得満期退学
- 経歴
 - 2006～2012年 一般企業（製造業）勤務 企業文化施設担当 学芸業務に従事
 - 2017～2021年 慶應義塾大学社会学研究科 研究員（非常勤）
 - 2021年～ 東京大学人文社会系研究科 基礎文化研究専攻 死生学応用倫理講座 特任研究員
- 資格
 - 2016年4月 日本アーカイブズ学会 登録アーキビスト
 - 2022年1月 国立公文書館 認証アーキビスト

スライド2

1. アーカイブズ学を学びきっかけ

アーカイブズ学を学ぶきっかけは、先ほどもふれた企業文化施設における体験です。企業資料の現場では、媒体別にさまざまな「資料」がありました。たとえば、過去製品の現物資料や、ポスター・写真・コマーシャルフィルムといった宣伝制作物、そして文書資料などがデジタル媒体も含め混在しており、こういった資料の多様さが特徴でした。これらに関して、社内外から日々多くの問い合わせが寄せられるのですが、中でも多かったのは社業にかかわる事実関係や文脈（コンテキスト情報）に関するものでした。しかし、私が学んできた「博物館学」と現場で活用されている「一点目録」では、こういったリクエストにこたえることは困難でした。博物資料、いわゆるモノ資料を表現する一点目録では、複数の書類がかたまりで存在する文書資料を十分に表現しきれていなかったということだったのだと思います。

問い合わせを受けた時、意外と役に立ったのは「社史」でした。会社の過去のできごと、例えば新製品の発売やその経緯、または役員交代などの人事的なことなどが、年月日や前後関係も含めて記述されているのです。重要な部分にびっしり付箋が貼られているなど、社史は現場でかなり活用されていました。ところが、ある日、上司から「社史にも間違いがあるから事実確認は慎重にね」と言われます。この一言により、「それでは一体何を見れば確実なことがわかるのだろうか？」と自分の中の問題意識が振り出しに戻りました。

ここから本格的に「信頼できる記録」に関する学問というものについて調べ始めました。そして、どうやら「史料管理学」「アーカイブズ学」というものがあるらしいということに行きあたります。自分なりにいろいろ考えたのですが、ここでいったんキャリアを中断することを決意します。退職後すぐに2012年度国文学研究資料館主催アーカイブズ・カレッジ（長期コース）を受講し、さらなる学びを求めて2013年に専攻へ入学し、本格的にアーカイブズ学の道に入っていました。

ここでの決心を後押しした要因は大きく2つあります。ひとつは「専門職の必要性」、もうひとつは「公文書管理法」の制定（2009年）です。企業資料の現場で、博物館学芸員や図書館司書とは違う専門職の必要性を痛感していたちょうどそのころに、公文書管理法の制定が話題となっていました。公文書管理法は、それまでの公文書管理の不備がさまざまに問題化し制定されたものです。「消えた年金問題」などがその代表例です。私はこのニュースに接し、おそらく公文書管理だけの問題ではないだろうと感じました。企業における文書管理も同様の課題を抱えていて、このような法整備は企業における問題解決の糸口、もしくはヒントになるのではないかと思ったのです。



2. 博士前期課程から後期課程へ:入学してみte気づいたこと

2013年に専攻に進学すると、さまざまな気づきがありました。まず、自分の学部時代(1990年代)とは研究環境が様変わりしていました。図書館の蔵書・資料検索のオンライン化、海外文献も含めた専攻室の専門書の充実ぶりなどです。コロナ禍以降はオンライン授業も始まり、ますます時間と空間を超えた学びが可能になってきています。



そして、この専攻では基本的な教科書とし

て*Keeping Archives*¹⁾というオーストラリアの書籍を用いるため、入学して早々に英語文献と格闘することになり、もう少し英語を勉強しておけばよかった!と思いました。さらに、先行研究を調べていくと、自分の抱えていた問題意識は自分一人だけのものではなかったことに気づきます。先人たちがすでに取り組み、ある程度答えが出されていた問題もありました。「研究」といったときには、何か一足飛びに「宇宙の大発見」をするような大げさなことを考えがちですが、現実にはきわめて地味な作業で、自分のなかにある問題意識を問い、答えをつくることなのだ、修士論文をまとめつつ思いました。

それから、当専攻で発行している研究年報『GCAS Report』のおかげで、博士前期課程の早いうちから書評や報告などの発表の機会を得られること、また編集委員会の作業を通じて学ぶ機会を得られることも、この専攻の大きな魅力だと思っています。そして、授業、学会、仕事、プロジェクトを通して先生方や研究仲間との交流が生まれたほか、人脈も広がりました。

3. 出産・子育て:出産後のキャリアに関しては無計画

2015年1月に修士論文を提出し、博士後期課程へ進学が決まった瞬間に妊娠が発覚します。そんな思いがけない展開から私の博士後期課程が始まりました。

出産前の7月に企業史料協議会²⁾主催の「資料目録セミナー」の講師を務め、修士論文で研究したアーカイブズ目録について発表しました。企業アーカイブズを担当する方々とのセミナー後の交流を通じて、自分の問題意識は間違っていなかったと自信が持てました。また、このセミナーで初めてアーキビストとして謝金をいただきました。自分にとって、とても感慨深く、思い出深いお仕事となりました。

ゼミには2015年前期まで出席しましたが、その夏の国内研修旅行(三重)は残念ながら

1—Jackie Bettington, Kim Eberhard, Rowena Loo, Clive Smith eds., *Keeping Archives 3rd ed.*, The Australian Society of Archivists, 2008.

2—<https://www.baa.gr.jp/> (以下、アクセス日は全て2022-12-12)

不参加となりました。専攻の友人達が研修旅行のお土産に伊勢神宮の安産守りを持ち帰ってきてくれて、そのおかげで出産を乗り切ることができたと思っています。そして、学習院開院記念日（!）の10月17日に男の子を無事に産みました。

翌2016年4月からゼミに復帰し、修士論文を元に論文を書き始めます。無計画に進んでいた出産後のキャリア計画ですが、夫が1年間の育休を取得（これのみ計画的）し、育児を分担してくれました。そのおかげで少しずつゼミや研究にも復帰できたので、夫にはとても感謝しています。

2016年9月には、専攻の先輩にご紹介いただき、非常勤の仕事を開始します。これは、文化庁平成28年度メディア芸術アーカイブ推進事業「アニメーション・アーカイブの機能と実践」のマニュアル制作というもので、2017年3月までの期間限定のプロジェクトでした。アニメーションの制作過程におけるさまざまな資料とその保存管理及び活用を検討する、といったとても意義深いプロジェクトでした。そして、これがある意味、キャリアのプチ再開となります。

そして、この年の10月、子供が1歳児になるところで保育園（短時間保育ですが）に入園することができました。就学+就業のポイントで運よく入れたようです。

4. アーキビスト(研究職)としての仕事:キャリア再開

前述したアニメーション制作資料の仕事に続いて、専攻関係者の紹介により別の仕事のお話をいただきました。とある医学史研究チームに参加し、医療アーカイブズを整理・分析してほしい、という依頼です。日本学術振興会の科学研究費助成事業（科研費）による雇用であり、2017年から2020年度までは慶應義塾大学所属、2021年度からは東京大学に所属しています。具体的には小峰研究所³⁾ 收藏の医療アーカイブズの編成、記述と分析が主な仕事です（スライド3）。

2017-2020年度の科学研究費助成事業「20世紀日本の長期療養型疾患の歴史—ハンセン病・精神疾患・結核の比較統合的検討」では、アーキビストの参加による資料分析精度の向上を目指しました。翌2021年度からの研究課題「20世紀日本の医療・社会・記録—医療アーカイブズから立ち上がる近代的患者像の探求」では、タイトルに「アーカイブズ」が入ってきています。それだけ、研究現場におけるアーカイブズの重要性が増してきているということであり、アーキビストとしても大きなチャレンジです。

ここで、私の仕事場の写真をご覧いただこうと思います（スライド4）。左の写真は私が資料整理にかかわり始めたころの小峰研究所の一室の様子です。それを右の写真のように整理しました。これは、ただお掃除して資料を箱詰めしただけではありません。資料をクリーニングしながら概要目録を取り、状態を分析しながら整理を進めています。

次のスライドでは、以前の資料編成と、私が資料整理・分析したのちの新資料編成をご

3— <https://komine-labo.info/>

アーキビスト（研究職）としての仕事：キャリア再開

- 2017年6月～現在 一般財団法人 小峰研究所収蔵の医療アーカイブズにかかわり現在に至る（専攻関係者の紹介）
- 日本学術振興会（学振）の科学研究費助成事業（科研費）による雇用（2017～2021年 慶應義塾大学 2021年～東京大学）
- 科研の研究課題

「20世紀日本の長期療養型疾患の歴史—ハンセン病・精神疾患・結核の比較統合的検討」（研究課題/領域番号：17H00830 研究代表者：鈴木晃仁 2017-2020年度）

「20世紀日本の医療・社会・記録—医療アーカイブズから立ち上がる近代的患者像の探求」（研究課題/領域番号：21H04343 研究代表者：鈴木晃仁 2021-2024年度）

スライド3

仕事風景：資料整理



スライド4

説明します（スライド5）。私がかかわる以前の資料編成「旧資料編成」では、症例誌とそれ以外（小峰雑資料A～D）、といった分け方がなされていました。「症例誌」とはいわゆるカルテのことですが、全体に占める物量が圧倒的なので、こういった区分となるのはある意味仕方ないかもしれません。ただし、「小峰雑史料A～D」は、何らかのカテゴリ分けを意味していたものでもありませんでした。これでは、症例誌以外に何があるかわからず、組織活動の把握にもつながらないといえます。

私が調査した結果、この資料群の作成主体となる組織は3つあることと、資料の編成は

仕事風景：小峰資料群の資料編成

▶旧資料編成（2002年頃）

1. 症例誌（病床日誌、看護日誌、体温板、処方箋）
2. 小峰雑史料A～D

症例誌以外何があるかわかりにくい
組織活動の把握につながらない資料編成

▶清水調査による資料編成（2017年以降）

- 対象組織： 王子脳病院（精神科・脳病科・脳脊髄病科）1901-1945
小峰病院（神経病科・内科、小児科、X線科）1925-1945
財団法人小峰研究所 1924-（1945休止-1985再認可）-現在
- 年代幅：明治期～昭和20年代ごろまで（組織活動が空襲によって休止～その後の事後処理まで）
- 箱数：250箱
- 資料編成： 1.医療記録 2.組織管理記録 3.研究資料 4.個人資料



スライド5

仕事風景：さまざまなしごと

- 学会発表、展示発表
- 資料のレファレンス：研究者、学生や遺族の閲覧対応、海外からの依頼も
- 共同研究：研究ネットワークを通じて目録作成の相談、資料室立ち上げの相談
- プロジェクト：英ウェルカムトラストとの共同プロジェクト「Mindscapes Tokyo」
- 小峰研究所のしごと：本年9月より資料責任者として理事に就任



国際ワークショップ「精神医療の「過去」と「現在」を展示する：医学史博物館と美術ギャラリーの社会的役割をめぐって」2018年9月10、11日
於：慶応義塾大学（日吉）来往舎ギャラリーにて



スライド6

大きく「1. 医療記録、2. 組織管理記録、3. 研究資料、4. 個人資料」に分けられるということがわかりました。私はこの調査を通じて、組織活動に対する理解度を高め、資料群をより立体的に把握することを目指したのです。

このような資料整理と目録作成以外にもさまざまな業務があります（スライド6）。たとえば、研究成果のアウトプットや、資料に関する問い合わせ、相談があります。また、小峰資料のことだけでなく、資料整理や目録に関して他大学に勤務する研究仲間から相談を持ちかけられることもあります。現在は、英国ウェルカム財団（大規模な医学図書館・

博物館を持つ研究機関)⁴⁾と連携し、Mindscapes Tokyoというプロジェクトにもかかわっており、仕事の現場においても再び語学の必要性を痛感しているところです。もっとちゃんと英会話も勉強しておけばよかった……（2回目）と後悔しています。

そうこうしているうちに、本年9月に小峰研究所の資料担当として理事に就任することになりました。財団の運営や、とりわけアーカイブズ運用ポリシーの策定にも決定権をもつことができる一方で、資料に対して大きな責任を担うことだと感じています。

まとめ:研究と仕事は地続き

ここまで、アーカイブズ学を軸に私個人のキャリアがどのように変化したかをお話ししてきました。私とアーカイブズ学とのかかわりは「信頼できる記録とは何か?」、「どのように文書資料群を理解するのか?」といった現場での問題意識から始まったものです。それは今でも私の研究関心の根底にあり続けるもので、先人たちの研究成果に助けられながら、少しずつ答えを出せるように努力しているところです。博士後期課程の研究のお話あまりできませんでした。メインテーマは企業アーカイブズであり、私の就業環境では仕事も研究もいわば地続きのところにあるといえるでしょう。アーキビストとしてのこれまでのキャリアを振り返ると、ありがたいことに専攻関係者からのご紹介が仕事へとつながっています。また、私自身も小峰資料群の整理の際には専攻の後輩数名に手伝ってもらったこともあります。アーカイブズ学のコミュニティはそれほど大きいものではありません。そのため研究上も、業務上も、先輩と後輩、知人同士がゆるやかにつながって、助け合いながら進めているような印象があります。

私のケースは、就業先がいわゆる公文書館や大学文書館といったアーカイブズ機関ではない事例になります。資料を収蔵しているものの、長年にわたり資料整理が十分ではなかった機関（小峰研究所）とその資料を研究利用したい研究チーム（鈴木科研）がアーキビスト（アーカイブズ学研究者）を求めたケースといえます。とはいえ、任期付きの雇用のため、先を見据えて就職活動をしなくてはなりません。キャリアとしては道の途上であり、研究と仕事はまだまだ続きます。私からのお話は以上になります。ありがとうございました。